

「ナラティブとは何か」の再考

Reconsideration of “What is Narrative?”

梓川 一

Hajime Azusagawa

はじめに

人は生きていくことで、物語をつくる。人が生き続けることによって、物語は生まれ続ける。換言すれば、物語をつくりながら、人は生きている。その生に基づいて多様に織りなす独自の物語になる。しかし、物語をつくることを日々意識して生活し、今を生きている人はあまりいないだろう。

社会生活をしていると様々な困難に出会う。この場合の困難とは、ソーシャルワークにおいても捉えられる生活や人生における課題や問題であり、そこから派生して内面で抱える悩みも含まれる。生活をしていると、個人の解決能力を超えた困難に出会うこともある。こうした困難に対して人はそれぞれの向きあいをするが、ここにも個人の独自性、当事者性がある。他人が、それらすべてをわかることはできない。悩むことは苦しいことであるが、すべてが人生における出来事と経験になる。困難や悩むことのの一つ一つも新たな物語になり、これらは人生の物語になる。

本稿においては、時代や社会におけるナラティブの捉え方、ナラティブに向きあうことの効果、ナラティブ・アプローチの実践、人生を振り返ることの意味に改めて着目し、ナラティブを再考する。

ナラティブがナラティブであるために

当事者・本人にとってのナラティブ

ポストモダン以前には、医学は、疾患あるいは患部に焦点化し、科学的観点から分析的に解明していた。モダニストが唱える科学の存在は有意であることを前提に、科学がエビデンスをベースとして効果と成果を証明し、それらが評価されてきた。こうした科学による価値の基準・認識・判断が、その時代や社会に生きる個人の生活や生き方にも大きな影響を及ぼした。

1980年代に入り、医学的に捉えられる疾患だけでなく、病気・病いとの向きあいには、心理学や文化人類学が捉えるナラティブ、ナラティブ・アプローチが注目され始めた。その後、「客観的な医学データをいくら集積しても、それは病いの経験を描き出すことにはならないという認識が広範に共有された」¹⁾ 時代や社会の背景がある。生きることや人生の苦悩に対する問いに、科学的立ち位

置から答えることはできなかった医学・医療においても、ナラティブの視点の必要性が認識されるようになった。

いかなる状況においても、患者・個人は一人の人間であり、一人の生活者であることから、患部のみを診るのではなく、一人の人間の存在としてその全体を捉える必要がある。斎藤は、Narrative based medicine (NBM) は、医療の現場において Evidence based medicine (EBM) を補完する概念・方法とされてきた経緯をおさえ、科学や医学にも解決ができない複雑な問題が生まれてくる今日の状況に、医学や科学が治療すべきとする患部に関する情報とその説明に限定するのではなく、患者を一人の生活者・主体者と捉え、「どのような生活をしているのか」「どのような人生を歩んで来られたのか」を聴き、人生の物語の主人公についてわかりあう医療が求められることを唱えて、ここにナラティブの必要性があるという²⁾。本人の語り (=ナラティブ) の傾聴から、人生の物語 (=ナラティブ) をベースに理解と支援を進めていくことが求められるのである。

そのためには、個人がありのままに語る事が重要になる。不安を抱えて緊張し、普段通りに語る事ができない状況では、本人にとってありのままのナラティブではなくなる (ただし、緊張して普段通りに語る事ができない目の前の個人のことを、そのまま受け止めるのであれば、この語りも一つのナラティブである)。病院内カンファレンスにおいて、医師から説明を受け、その後、患者や家族が語る時に、本来のナラティブではなくなってしまう、あるいは、本人が望んでいないナラティブになってしまう可能性がある。一人の患者が医師にナラティブを語る事ができるためには、患者が今ここに置かれている状況・関係性・環境を整えること、普段通りの心理状態に近づける配慮が必要になる。患者を取り巻く普段の生活環境や人間関係について診ていく・聴いていく向きあい求められる。ありのままに本音を語る事ができれば、本人にとっての本来のナラティブに近づくことができる。

現代社会におけるナラティブ

既に述べたように、人は、生きながら物語をつくり、物語をつくりながら生きている。まさに「私たちは、ナラティブのなかにある、あるいは、ナラティブとともに生きている」³⁾。例えば、難病者は、一人の患者として医療機関で検査や治療をして、医学が提供する科学的現実と向きあう生活場面に生きている。一方で、難病者と難病者がピア・サポートの場面で向きあうこともあり、日々抱える苦悩を互いに表出しあう関係性をもって、「難病者同士の世界観から生まれる物語的現実」⁴⁾ という生活場面にも生きている。森岡は、「私たちは、ハードな事実の世界 (hard facts) と、出来事を自分の体験として筋立てる物語の世界 (storied world) の両方の現実を生きている」として、ナラティブは、出来事と出来事をつなぎ、秩序立て、出来事としての体験に意味を与えていくという。さらに、病いをもつ患者の場合、病いという出来事と過去からの出来事を結びつけようとして納得できる関連と意味づけを探そうとする⁵⁾。

日常的ではない状況におけるナラティブの効果や意義もある。サトウは、心理学領域におけるナラティブの可能性を探求し、イレギュラーや例外的事象に対応できるナラティブの特徴を取り上げて、現代社会におけるナラティブの援用とその可能性について論じ、特に、個人の現実を和らげた

現実に変形できること、悲しみの現実を物語ることによって耐えられるものにするをともに、ナラティブの本質とは意味づけにあるとする⁶⁾。

ナラティブは、一人の個人においても、同じ場面においても、個人の捉え方や置かれた状況によって、多様に変化し、複数存在する。「語る者と聴き取る者との関係でさまざまに変化し、その時々変容し、周囲の者の多様な解釈をも含みこんで成長する生きた経験なのである」⁷⁾。ナラティブを一定の枠の中に閉じ込めたり、限定化させてしまうことは、ナラティブであることを失わせることにもなる。

ナラティブが生まれるために

(1) ありのままの姿で、対等な二者の関係性をつくる

例えば、難病者同士が語りあうとき、彼らの内面には「ありのままの自分になれる」「自分に正直になれる」「互いがわかりあえる」「わかってくれるがゆえに安心できる」「仲間とともに自分の人生の物語に向きあえる」「仲間とともにここにいる」「仲間同士の居場所ができあがる」「共感しあえて心が安定する」などの気持ちがある⁸⁾。つまり、ナラティブが生まれてくるために、語り手と聴き手は、第一に、ありのままの姿で語りあう。第二に、日常的な会話、わかりやすい言葉で語り続ける。第三に、ここにともにいる互いの気持ちを大切にす。第四に、個性・独自性を尊重しあい、わかってくれるという信頼感・安心感をもつ。こうした対等な語り手と聴き手が、ともに居続けることで、自他を信じあう関係性ができ、対話ができ、そしてナラティブは生まれてくる。

しかしながら、関係性がすべて想定通りにはならないこともある。「良好な関係を築いてきた聴き手に語られたナラティブが、そうでない聴き手に語られたナラティブよりも信頼性が高いとは言えない」こと、「良好な関係であるからこそ、語りにくいこともあるし、語らないこと」もある⁹⁾。これは逆説的な内容にも汲みとれるが、信頼関係があるからこそ、本音の物語を語りにくいという個人の心情や関係性について留意していく必要があることを指摘している。

(2) 共同作業から新しい物語に出会う

語り手と聴き手が、「対等な参加者による会話」¹⁰⁾として「会話がどこへ向かうのかをあらかじめ決めずに」¹¹⁾、これからどのような語りあいをするのかも意識しないままの関係性と状況を維持していくことで、ナラティブの世界観は自由に広がり展開していく。二者が語りあい・聴きあいを続ける道中において、日常生活に埋もれていること・隠れていることに気づいたり、あるタイミングでそれらが現れてきたりする。そして「いまだ語られなかった物語」¹²⁾に出会うこともある。こうして語り手と聴き手は、「いまだ語られていない鉾脈を探る」¹³⁾共同作業に取り組んでいる。「物語の語り手と聴き手によって共同生成されるダイナミックなプロセス」¹⁴⁾から、ある「過去の出来事は、新たな多くの可能性を呼び起こす想像力を喚起し、新しい物語作品と新しい歴史がそこから創り出される」¹⁵⁾こともある。

語り手と聴き手は、このような共同という相補関係を保ちながら、二者の対話を通じて新しい出会いに遭遇し、自らも予期していなかった新しい物語が生まれてくる。こうしたプロセスとは、「新しい物語が会話のなかで浮上してくるものを期待するが、それは計画されたものではなく、自然に

生まれたもの¹⁶⁾であり、予定調和的なものではない。それゆえに、語り手も聴き手も、常に新鮮な気持ちで歩み続けることができる。こうした二者の歩みの時間も、関係性から展開されるナラティブにおける物語の時間も、「逆行したり、回帰したり、循環したり、止まったり、いろいろな流れ方¹⁷⁾」をして、あたかも「人間の経験する時間に近い¹⁷⁾」ものがあるといわれる。ここに、生きることとナラティブの一体性を感じ取ることができ、ナラティブの魅力がある。

ナラティブ・アプローチと新たな提案

ナラティブ・アプローチとは

ナラティブ・アプローチは、当事者の内面の汲み取りをする一つの手法として、心理領域だけでなく、看護領域や社会福祉領域においても活用されている。最近では、企業・組織におけるマネジメントや人材教育の新たな手法としても応用されている¹⁸⁾。ナラティブ・アプローチとは、「第一に、本人の主観的な世界から生み出されてくる言語によって構成されていく物語がどのように作られてきたのかに着目する。第二に、その物語とは多様に変化をしていくことを理解し、向きあっていく¹⁹⁾」対人援助の実践的アプローチであり、社会構成主義の理論・思想に基づいている。

社会構成主義によれば、現実とは、社会関係や人間関係における人と人が向きあい、対話するところとして、「言葉のやりとり、語り方の慣習²⁰⁾」から生まれてくるのであり、科学が捉えるように既存のものではない。つまり、対話する者同士がつくりあげる世界観であり、対話という日常的な言葉で広がる物語的現実である。さらに、現実とは「社会的に構成される²¹⁾」のであり、「われわれが生きる現実はいわゆる相互の交流をとおしてソーシャルに構成されるもの²²⁾」である。すなわち、わかりやすい言葉、わかりあおうとする対話を通して、人と人が向きあう社会的な関係性や環境において現実がつくれ、構成される。こうした物語的現実において、人と人は「他者との会話によって育まれる物語的アイデンティティのなかで、そして、それを通して生きる²³⁾」のである。

ナラティブ・アプローチは、個人が内面で抱え・所有する物語に焦点をあてながら、心理領域あるいは社会福祉領域等の対人援助実践の方法として活用される。過去の出来事や経験により、強固に抱え込んでいるドミナント・ストーリー（これまでの物語）を、専門職と向きあいながら吐き出し、崩壊させていく。自らのストレングスを認めながら拾い上げ、専門職とともにオルタナティブ・ストーリー（新しい物語）を構築していく。

吉村らは、「語り手と聴き手の人間関係を構築し、コミュニケーションや観察といった通常用いる方法では到達できない語り手を理解する可能性を提供するもの²⁴⁾」と捉える。そのためには、語り手のことをわかろうとする感性や人間観も求められる。そのうえで、ナラティブ・アプローチを活用することに、「患者の生活の質（QOL）を高め、ネガティブな考えの物語を、ポジティブな考えの物語へと変化させ、……、今後の生き方に新しい意味を見つけて、自己決定力を導き出す²⁵⁾」ことの重要性を唱える。つまり、ナラティブ・アプローチは、ストレングスに焦点をあてつつ、自らが潜在的にもっている資質あるいは能力を、自らが信じていくことで引き出し、そして自己変容を促す。

ナラティブ・アプローチに登場するナラティブには、治療を受ける本人・当事者だけでなく、その家族、対人援助の専門職も一人の当事者と捉えるのであり、彼らのナラティブも含まれる。つまり、「当事者である患者・家族・医療者それぞれの文脈から、体験されていることの意味解釈を大切にしながら、互いの物語の違いを理解し、ともに納得できる地点を見つけだしていくアプローチ」²⁶⁾である。それぞれのナラティブから汲みとることができる意味世界を、ナラティブ・アプローチの場面で向きあう三者で共有し、わかちあうことで、その世界は自由に広がる。ナラティブ・アプローチでは、援助をする者と援助を受ける者が側に分かれて、対峙する関係にあるのではなく、ナラティブが媒体とする向きあい・対話が、対等な人間関係を生み出していく。

セルフ・ナラティブ・アプローチの提案

筆者は、難病やガンの方々のピア・サポート実践においてナラティブ・アプローチを取り入れている。当事者自身によるセルフ・エンパワメントに着目し、彼らの主体性を尊重できるピア・サポートあるいはナラティブ・アプローチを考えてきた。そこで、人生の物語（ナラティブ）を当事者自身で振り返ることができる一方法として、試案の段階ではあるが、ナラティブ・アプローチを土台とした「セルフ・ナラティブ・アプローチ」を提案したい。今後、さらに具体化していく。

セルフ・ナラティブ・アプローチの基本的方法は、ナラティブ・アプローチに準じる。ナラティブ・アプローチでは、語る者と聴く者は別人の二人として向きあうが、セルフ・ナラティブ・アプローチでは、本人の内面に「主観的にナラティブを語る自分」と「客観的あるいは主観的にナラティブを傾聴する自分」を設定する。この二人の自分がそれぞれに立場性と役割を意識して、語りあい・聴きあう。そこからこれまでのナラティブ（ドミナント・ストーリー）に向きあい、可能であれば崩していく。ストレンクス視点からセルフ・エンパワメントをするプロセスを通じて、自己肯定感、自己効力感を高め、これからのナラティブ（オルタナティブ・ストーリー）をつくり出していく。

セルフ・ナラティブ・アプローチでは、内面に抱える思いを記録シートに書き出すことによって外在化する。具体的には、「ナラティブを語る自分」の記入欄に、語り手として語りの内容を記録する。次に、「ナラティブを傾聴する自分」の記入欄に、聴き手として受け止めた思いを記録する。専門職はそれら記録内容を汲みとり、支援につなげる。セルフ・ナラティブ・アプローチの展開は、自己の内面で進めていくことから、当事者に迷いや揺れが生じる可能性もあるため、専門職と共同で取り組む。専門職による見守りやファシリテート、特に緊急時には、専門職の助言や支援が必要である。

想定しうるセルフ・ナラティブ・アプローチのメリットや効果を整理する。第一に、自らの内面における向きあいと取り組みであるため、対等な関係性を維持することができる。第二に、ストレンクス視点をもって自分に向きあい、セルフ・エンパワメントができる。第三に、自らの能力や資質を認め、自己肯定感や自己効力感のアップにつながる。第四に、日常的な場面で実践することができる。

セルフ・ナラティブ・アプローチの留意点も整理する。第一に、内面に抱え込むことになれば、精神的負担が大きくなる可能性がある。第二に、個人の価値観や状況に左右される。セルフ・エン

パワメントができるためには、専門職の支援・見守りも必要になる。第三に、治療を目的とするのではなく、日常生活場面において自分自身に向きあう・見つめ直す機会を得ることを主たる目的とする。

ナラティブを通じて、人生を振り返る意味

振り返るということ

人は、自らの物語をつくり、物語を振り返るチャンスをもつ。しかしながら、ある出来事に直面し、体験している時点には、そのことが本人にとって「これが人生の物語になる」、「どれほどの意味があるのか」等について認識はできないだろう。その後、ナラティブを振り返るチャンスをもつことで、冷静に過去の状況に身を置き、歩んできた人生を探索・自問することもできる。

人は困難に出会うことにより、これまでの人生を振り返り、人生の物語（ナラティブ）も感じる。生きている限り、何らかの困難に出会う。困難の捉え方にはそれぞれ独自のスタイルがあるが、困難を避けて生きていくことはできない。これから生きていくためには、人生における困難を、どのように受け止め、捉え直し、受け入れていくことができるかが問われる。

ナラティブを通して、語り手と聴き手は物語的世界を共有し、互いに自らの人生に向きあい、過去の困難とともに向きあうことができる。「語りを聞くということそのものが、語り手と聴き手との間に対話を生み、語り手は自分自身の体験をふり返り、なにが問題なのか、次になにをすべきなのかに気づくプロセスになっている」²⁷⁾。人は日々生活をしながら、物語をつくり、意味づけをしていることを意識しないままに生活をしているようであるが、やまだは、「一瞬ごとに変化する日々の行動を構成し、秩序づけ、経験として組織し、それを意味づけながら生きてい」²⁸⁾とし、ゲーリシャン (K. J. Gergen) らは、「人は他者とともに作り上げた物語的な現実によって自らの経験に意味とまとまりを与え、そうして構成された現実を通して自らの人生を理解し生きる」²⁹⁾という。つまり、語り手と聴き手がともに向きあう・歩むことで、「それぞれが持つ世界に相互に影響しあう存在」³⁰⁾となる。そこから生まれてくる「意味は…相互の産物」³¹⁾なのであり、「ストーリーやテキストの中に隠されたもともとの意味というものは存在しない」³²⁾のである。こうして過去の困難に向きあうことで、ナラティブを振り返るチャンスを得ることができ、これまでの人生の意味づけに向かうのである。

自らの存在を認め、これから生きる

人生における困難を思い起こすことで、人生を振り返り、過去の自分、揺れる自分に向きあう。「これまで、どのように生きてきたのか」「どのような人間関係のなかで、生きてきたのか」「どのような人に、支えてもらってきたのか」等、物語を辿りながら内観することで、物語に登場する人物に再会することができる。生きてきた過程には、多数の関係性が存在するのであり、多数の人々の支えがあったことを再実感する。これは、今まで生きてきたこと、今を生きていることを再実感することでもある。

人生・物語を振り返ることで、新たに感じる事、改めて気づくこともある。渦中においては苦しい根源であった困難が、自らの人生の一場面を再認識することを促すのであり、長い人生におけるあるナラティブとして、自らが生きてきた証＝アイデンティティにもなる。人生における体験や出来事を通じて、自らの成長・変容に気づくこともできる。

ナラティブの捉え方・観点とは、これまでの人生を振り返り、人生の物語として自らの人生を引き受けていくことにある。「これまでの人生＝過去の人生」に向きあい、これまでの自分を認め、これから生きていく自分も認めていく。ナラティブを通して、「仲間とともに人生に向きあうことができ、そのうえで『ありのままの私とあなたでいい』と認めてくれる。そして気づけば、変容を遂げている」³³⁾のである。

人生の困難に向きあうと、「なぜ、私がこのような困難に出会わなければならないのか」と、自らの人生への問いに、物語的現実が答えてくれることがある。ナラティブに向きあうことで、「なぜ、生きるのか」「これから、どのように生きるのか」等、人生に問いかけることもできる。五木は、人生の目的とは、「自分の人生の目的を探ること」であり、「おそらく最後まで見出すことのできないものなのだろう。自分でつくるという道もある。自分だけの人生の目的をつくりだす。それは、一つの物語をつくることだ。自分で物語をつくり、それを信じて生きる」³⁴⁾ことであるという。つまり、人生の目的とは、物語（ナラティブ）をつくることにある。それは、現在から未来に続くナラティブであり、これからつくられるナラティブを信じることで、人は生きていくことができる。

おわりに

「ナラティブとは何か」「ナラティブの世界観」から、「いかに生きるか」の問いにつながる。人は長い人生において様々な困難に出会い、いかに向きあい、対応・対処することができるかが問われるが、これも人生＝ナラティブであるといえる。

改めて、ナラティブの視点やナラティブ・アプローチの実践を再考すると、過去から現在そして未来につながるナラティブを安心してつくり続けることができるための支援が、これからの社会において求められると思われる。広く対人援助の専門職は、自らの専門性をもって、当事者個人が生きていることを、どのようにわかちあい、どのように支援・実践ができるかについて再考する必要があるだろう。

これからの現代社会はいつそう多様化を歩むとされる。ゆえに、個人の生活や人生における個性も要求され、尊重されなければならない。複雑で深刻な困難も起きてくる地域社会の状況にあって、その解決方法を明らかにすることはますます困難になっていく。対人援助の領域や場面において、当事者主体が注目されている今日、多様な市民がともに暮らす地域共生社会の創造に向けて、「個人の物語を超えて、現世代から、次の世代や未来世代へのコミュニケーションとして、世代と世代、時代と時代をつなぐ働きを担う」³⁵⁾とされるナラティブは、今後、さらに貴重な価値を発揮するだろう。

引用文献

- 1) 江口重幸. (1999). 病いの経験を聴く. 小森康永・野口裕二・野村直樹 (編). ナラティブ・セラピーの世界 (p.37). 日本評論社.
- 2) 斎藤清二. (2019). 医療におけるナラティブ・アプローチの最新状況. 日本内科学会雑誌, **108**, **7**, 1463-1468.
- 3) 矢崎千華. (2016). ナラティブ分析を再考する：構造への注目. 関西学院大学紀要, **125**, 47-57.
- 4) 梓川 一. (2018). ナラティブ・アプローチの専門性と課題：難病ピアカウンセリング実践に通じる要素の探索へ. 東大阪大学教育研究紀要, **16**, 23.
- 5) 森岡正芳. (2017). ナラティブが必要な時：臨床実践と研究で. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **16**, 1-8.
- 6) サトウタツヤ. (2018). ナラティブの意義と可能性. 言語文化教育研究, **16**, 2-11.
- 7) 江口重幸. (1999). 病いの経験を聴く. 小森康永・野口裕二・野村直樹 (編). ナラティブ・セラピーの世界 (p.39). 日本評論社.
- 8) 梓川 一. (2019). 難病ピアの質的調査の特徴：変容と相互支援. 豊岡短期大学論集, **16**, 109.
- 9) 野口裕二. (2005). 研究方法としてのナラティブ・アプローチ. 日本保健医療行動科学会年報, **20**, 3.
- 10) 野口裕二. (1999). 社会構成主義という視点. 小森康永・野口裕二・野村直樹 (編). ナラティブ・セラピーの世界 (p.28). 日本評論社.
- 11) 野口裕二. (1999). 社会構成主義という視点. 小森康永・野口裕二・野村直樹 (編). ナラティブ・セラピーの世界 (p.28). 日本評論社.
- 12) 野口裕二. (1999). 社会構成主義という視点. 小森康永・野口裕二・野村直樹 (編). ナラティブ・セラピーの世界 (pp.28-29). 日本評論社.
- 13) Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1997). ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践 (野口裕二・野村直樹訳). p.84. 金剛出版. (Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1992). Therapy as Social Construction, Sage Publication Ltd.,)
- 14) やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味. やまだようこ (編). 人生を物語る：生成のライフストーリー (p.1). ミネルヴァ書房.
- 15) Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1997). ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践 (野口裕二・野村直樹訳). p.84. 金剛出版. (Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1992). Therapy as Social Construction, Sage Publication Ltd.,)
- 16) Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1997). ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践 (野口裕二・野村直樹訳). p.45. 金剛出版. (Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1992). Therapy as Social Construction, Sage Publication Ltd.,)
- 17) やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味. やまだようこ (編). 人生を物語る：生成のライフストーリー (p.7). ミネルヴァ書房.
- 18) 梓川 一. (2018). ナラティブ・アプローチの専門性と課題：難病ピアカウンセリング実践に通じる要素の探索へ. 東大阪大学教育研究紀要, **16**, 2.
- 19) 梓川 一. (2018). ナラティブ・アプローチの専門性と課題：難病ピアカウンセリング実践に通じる要素の探

索へ、東大阪大学教育研究紀要, 16, 3.

- 20) Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1997). ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践(野口裕二・野村直樹訳). p.19. 金剛出版. (Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1992). Therapy as Social Construction, Sage Publication Ltd.,)
- 21) 野口裕二. (1999). 社会構成主義という視点. 小森康永・野口裕二・野村直樹(編). ナラティブ・セラピーの世界 (p.18). 日本評論社.
- 22) 野口裕二. (1999). 社会構成主義という視点. 小森康永・野口裕二・野村直樹(編). ナラティブ・セラピーの世界 (p.18). 日本評論社.
- 23) Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1997). ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践(野口裕二・野村直樹訳). p.65. 金剛出版. (Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1992). Therapy as Social Construction, Sage Publication Ltd.,)
- 24) 吉村雅世, 内藤直子. (2004). 看護ケアにナラティブ・アプローチを導入した老年患者の語りの変化の研究. 日本看護科学会誌, 24, 4, 4.
- 25) 吉村雅世, 内藤直子. (2004). 看護ケアにナラティブ・アプローチを導入した老年患者の語りの変化の研究. 日本看護科学会誌, 24, 4, 12.
- 26) 松葉祥一他. (2014). 系統看護学講座 別巻 看護倫理 (p.142). 医学書院.
- 27) 松葉祥一他. (2014). 系統看護学講座 別巻 看護倫理 (p.145). 医学書院.
- 28) やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味. やまだようこ(編). 人生を物語る：生成のライフストーリー (p.5). ミネルヴァ書房.
- 29) Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1997). ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践(野口裕二・野村直樹訳). p.62. 金剛出版. (Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1992). Therapy as Social Construction, Sage Publication Ltd.,)
- 30) Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1997). ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践(野口裕二・野村直樹訳). p.72. 金剛出版. (Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1992). Therapy as Social Construction, Sage Publication Ltd.,)
- 31) Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1997). ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践(野口裕二・野村直樹訳). p.72. 金剛出版. (Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1992). Therapy as Social Construction, Sage Publication Ltd.,)
- 32) Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1997). ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践(野口裕二・野村直樹訳). p.45. 金剛出版. (Sheila McNamee, & K. J. Gergen. (1992). Therapy as Social Construction, Sage Publication Ltd.,)
- 33) 梓川 一. (2020). ささえあいから生まれる「苦悩の語り」と価値認識の変容. 日本保健医療行動科学会年報, 34, 2, 9.
- 34) 五木寛之. (1999). 人生の目的 (pp.274-275). 幻冬舎.
- 35) やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味. やまだようこ(編). 人生を物語る：生成のライフストーリー (p.2). ミネルヴァ書房.

